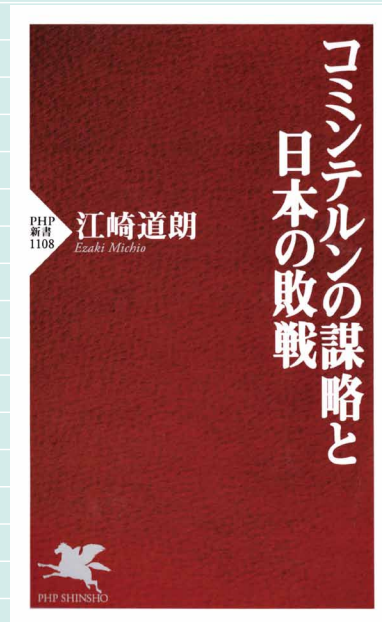


『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』

◆著者——江崎道朗
◆発行所——PHP研究所
◆定価——九八〇円(税別)



ISBN : 978-4-569-83654-6

がすべてを操った」などという安易な陰謀論ではなく、つけ込まれたわが国の問題点を明らかにすることにある。

筆者は、急激な近代化の中でわが国のエリートが自国の歴史・伝統から断絶されたこと、経済政策の失敗と社会保障の未熟から深刻な格差・貧困・労働問題が生まれたことなどを背景に、昭和初期のわが国が左から右(→)まで、当時最先端だった社会主義に染まっていたことを指摘する。右傾化した軍国主義者が戦争を始めたとよくいわれるが、五・一五事件の檄文がコミンテルンの宣伝と酷似していることが示すように(檄文の「天皇」を「共産党」に置き換えれば、そのまま共産主義になる)、彼ら右翼の本質は実は社会主義者だった。

国が社会主義から全体主義へと転げ落ちる中、少数ではあったが議会制民主主義と自由経済を守るべく左右の全体主義者と戦った人々がいた。彼らが全体主義の罠に陥らなかつたのは、わが国の歴史・伝統を正しく継承していたからだ。本書は、当時の構図を「保守自由主義」vs「右翼全体主義」「左翼全体主義」と的確に整理する。筆者が保守自由主義者として紹介する美濃部達吉・吉野作造・佐々木惣一・小田村寅二郎らの存在に、われわれは小さな希望を見出すことができる。

(広報部部員 満岡 渉)

わが国が大東亜戦争に至った経緯は極めて不可解だ。日清・日露から日韓併合に至るまで日本の最大の脅威はロシアであり、満州国の建設目的のひとつはロシア(ソ連)からの本土防衛だったはずである。ところがその満州のために国際連盟を脱退し、支那事変の泥沼にはまり、支那を支援する英米を敵に回し、戦争目的も最終方法も曖昧なまま真珠湾を攻撃する。対象敵国がソ連↓中国↓英↓米と180度変わったあげく、戦うべきでない相手と戦って国が滅びかけたのである。

どうしてそんなことになったのか。様

々な要因があつたにせよひとつはつきりしているのは、ソ連⇨コミンテルンの関与を抜きにこの経過を説明できないことだ。コミンテルンとは、1919年にレーニンが結成し、共産革命を目指して世界中で謀略を行った「共産主義インターナショナル」の略称である。本書は、コミンテルンがいかにして日本をソ連ではなく英米と戦うように仕向けたかを検証する(例えば工作員・尾崎秀実と昭和研究会は、支那事変を拡大させ、事変解決のために英米資本主義国と戦うべきだと扇動した)。だが本書の趣旨は、「コミンテルン